

○インフルエンザ HA ワクチン [注]

【重要度】 【一般製剤名】 インフルエンザ HA ワクチン influenza virus vaccine 【分類】 ウイルスワクチン

【単位】 0.5mL/回

【常用量】 1回 0.5mL

【用法】 皮下注。2回接種の場合4週間の間隔をあける

皮下注よりも筋注で感染予防効果が高く、接種時の疼痛も軽度である（馬嶋健一郎，他：環境感染誌 36: 44-52, 2021）

【透析患者への投与方法】 接種が推奨されており、投与量は同じ（1）抗体価は透析例でも健常人と同様に得られるが、フェリチン低値例では免疫反応が弱い可能性がある（Scharpe J, et al: Am J Kidney Dis 54:77-85, 2009）ワクチン接種によるインフルエンザ様疾患の罹患、インフルエンザまたは肺炎による入院、全死因死亡を予防する効果はほとんどない（McGrath LJ, et al: Arch Intern Med 172:548-554, 2012）HD 患者への接種には効果がある（Wang IK, et al: PLoS One 8: e58317, 2013）ワクチン接種による予防効果は小さいものの、推奨するだけの根拠がある（Remschmit C, et al: BMC Med 12: 244, 2014）

【PD】

PD 患者への接種は発症率や死亡率を有意に低下させ、経年的接種でその効果は増大する（Wang IK, et al: Nephrol Dial Transplant 31: 269-74, 2016 PMID: 26453199）

HD 患者に抗原量を増やしても効果はない（Butler AM, et al: Am J Kidney Dis 75: 72-83, 2020 PMID: 31378646）

【保存期 CKD 患者への投与方法】 接種が推奨されており、投与量は同じ（1）

【特徴】 インフルエンザウイルス抗原を含有する不活化ワクチン。通常、A 型、B 型の混合ワクチンとして冬期前に接種される。

【副作用】 ショック、アナフィラキシー様症状、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）、ギラン・バレー症候群、けいふん、肝機能障害、喘息発作、ネフローゼ症候群、発熱、頭痛、倦怠感、一過性意識消失、めまい、リンパ節腫脹、嘔吐、下痢などの全身症状や発赤、腫脹、硬結などの局所症状

【主な臨床報告】 肺炎球菌ワクチン（PPV23）との同時接種でも副反応は増加しなかった（眞継賢一，他：日病薬誌 52: 559-62, 2016）

【備考】 生ワクチンの接種を受けた者は通常 27 日以上、他の不活性化ワクチンの接種を受けたものは通常 6 日以上の間隔を置いて接種する（1）冷蔵庫から取り出し室温になってから必ず振り混ぜ均等にして使用する。バイアルに一度針をさしたものは遮光、冷所保存し 24 時間以内に使用。同一接種部位に反復して接種することは避ける。注射後はマッサージしない。

【更新日】 20220409

※正確な情報を掲載するように努力していますが、その正確性、完全性、適切性についていかなる責任も負わず、いかなる保証もいたしません。本サイトは自己の責任で閲覧・利用することとし、それらを利用した結果、直接または間接的に生じた一切の問題について、当院でいかなる責任も負わないものとします。最新の情報については各薬剤の添付文書やインタビューフォーム等でご確認ください。

※本サイトに掲載の記事・写真などの無断転載・配信を禁じます。すべての内容は、日本国著作権法並びに国際条約により保護されています。